

教員評価がどの県も試行から本格実施となってきた。しかし、これを教師評価とは言わない。思えば、教員採用試験と言うが、教師採用試験とは言わない。教員免許状と言うが、教師免許状とは言わない。まだある。教員養成と言うが、教師養成とは言わない。この教員と教師の違いはどこにあるのだろうか。

まずは、ネット辞書で調べてみた。

【教員】学校職員のうち、直接教育に従事する職員の総称。教育職員。教師。先生。[大辞林]
【教師】1 学校などで、学業・技芸を教える人。先生。教員。2 宗教上の教化を行う人[大辞泉]

と、あるがよく分からない。分かったのはどちらも先生と言うことである。では、員と師はどうであろうか

いん[キン]【員】

1 人や物の数。2 (名詞に付き、接尾語的に用いる)ある組織に加わっている人、組織の中で何かの役や係を持つ人の意を表す。「銀行一」「評議一」「係一」[大辞泉]

し【師】

1[名]

- 1 学問・技芸を教授する人。師匠。先生。「一の教え」
- 2 僧・神父・牧師などを敬っていう語。
- 3 中国、周代の軍制で、5 旅(りょ)すなわち 2500 人の称。転じて、軍隊。「征討の一を起こす」

2 [接尾]

- 1 技術・技芸などを表す語に付いて、その技術の専門家であることを表す。「医一」「理髪一」
- 2 僧侶・神父などの姓氏に付けて、尊敬の意を表す。「ホメイニー」

[大辞泉]

ここまで調べ、やっと分かった。教員採用試験に合格し、教員にはなれても教師になれるかどうか分からない。「師」には、どうやら尊敬という文字がついてまわるようだ。つまり、教師は子どもたちから尊敬され、慕われることが最低条件であろう。

今、求められているのは教員ではなく教師ではないだろうか。誰も意識しているわけではないが、子どもが好きで、教員採用試験を受け、一応教員となった先生が、信頼と尊敬を受け教師と言われても、教師であり続けることは非常に難しい。また、一度や二度くらいの尊敬で、自らを教師と呼ぶ者は幸い私の回りにはいない。みな謙虚であり、自己研鑽に励む先生が多い。常に専門性を磨こうと謙虚にひた向きに努力する先生は、向上心が宿っているし、何よりも温かい。これは経験から分かることでもある。

ある会議に参加し、ある指導主事が、教師力は情熱＋専門性＋人間性と言われた。なるほどと思ったが、よく考えればこれは当たり前である。教員力ではなく、教師力だからである。教員が教師となるための条件であろう。厳しいようだが、教員となった者が教員のままで、教育界で居てよいはずはない。

しかし、学校現場、特に教育活動の最前線にいる担任は、さまざまな教育問題に直面し、迷い、悩み、苦しんでいる。それに、初めからなかった「ゆとり」が問題となり、「ゆとり」バッシングの嵐の中、情熱の糸を教師がいつまでも紡ぎ続けられるかが気になる。その情熱の糸を強く、太くするのは自分であろうが、それだけではないような気がする。情熱の火を灯し続ける拠り所に、ブレがきていることを心配している。

(芝)